

「水土を守る人々」では、農業や農業用水の役割とこれらが持つ多面的機能等が十全に発揮されていくために、農業水利施設等の維持管理を支える人々の日常にスポットを当てて、その取り組みを紹介することで、農業農村整備や多面的機能の発揮が「人」の支えの上に成り立っていることを伝えていきます。 ※不定期で掲載いたします。

**伝え流るる歴史の清流～世界かんがい施設遺産・照井堰用水～を守り引き継ぐために奔走する農業土木技術者**

～照井土地改良区 遠藤 圭二郎 氏～岩手県一関市

今回「水土を守る人々」で紹介するのは、照井土地改良区に勤務する工務課係長の遠藤圭二郎さん。

遠藤さんは施設管理だけではなく、地域農業の発展に大きな役割を果たしています。遠藤さんは、平成12年から勤務して今年で19年目。平成29年度に工務課係長に昇任。管理している土地改良施設は、山間部や市街地、一部の水路は毛越寺（世界遺産）に近接している。また、平成28年11月8日に、世界かんがい施設遺産に登録された「照井堰用水」も管理する施設の一つである。そのような施設を管理する上での「苦労」や「やりがい」、「これからの展望」について伺いました。

<照井土地改良区と照井堰用水の歴史について>

照井土地改良区（以下「本改良区」という。）の受益は、岩手県南部の一関市及び平泉町に広がる約1,920haの水田地帯です。

本改良区の歴史は古く、今から900～850年前の奥州藤原時代まで遡ります。当時、干ばつや飢饉で苦しみ悩まされ続けた村々の窮地を救うために立ち上がったのが、鎮守府軍藤原秀衡公の家臣で普請奉行であった照井太郎高春でした。その高春の企画により、五串の滝（天然記念物指定）より3kmほどさかのぼった当時の五串村、猪岡村の磐井川兩岸に穴堰を開削しました。これが照井堰の起源です。

その後、照井太郎高春は志半ばにして藤原氏滅亡と共に没しましたが、

その下流の水路を高春の子孫高安が荻荘荘司と相諮り私費を投じて、高春の意志を引継ぎ完成させ、村々にかんがいさせたと伝えられています。農民たちは長い年月の夢であった用水に歓喜し、照井氏の偉業を称えその姓を付け照井堰と称したとのことでした。

それ以降も、この地方を治めていた葛西氏や伊達藩による幾度の改修、照井の子孫大肝入掃部左衛門の大改修、柏原清左衛門による北照井堰の開削、清左衛門の孫柏原新十郎と千葉半右衛門の北照井堰の改修などの大改修がなされました。

そして、明治維新廃藩置県後、照井堰の管理は岩手県になりましたが、明治41年からは照井堰普通水利組合が管理し、昭和27年からは照井堰土地改良区が管理しています。その後、昭和60年に大江堰土地改良区と合併して照井大江土地改良区、平成8年に舞川土地改良区と平泉土地改良区と合併して照井土地改良区となり、照井太郎高春の意志を継承し、この地域の米作りに大切な「水」を守り続けています。

## 1. 用水管理と施設管理

遠藤さんの主な業務は、用水路の巡回点検や水量調整など維持管理全般。かんがい期は毎日約64kmの幹線用水路を巡回しています。また、本改良区では、幹線用水路に小水力発電施設を2箇所（照井発電所、荻野発電所）設置しているため、小水力発電施設の維持管理を年中行っています。

これまでの経験で、苦労したことを尋ねると「平成14年の台風6号では被災箇所が多く、復旧作業が大変だった。しばらくは雨の音がトラウマになりました。」と遠藤さん。うれしかったことを尋ねると「出前授業をした地元の小学生からの手紙に『改良区職員になりたい。』という子どもたちの声があったこと。」と語ってくれました。また「苦労することが多く、毎日多忙であるが、やりがいと刺激があって楽しい。」と語る姿は、とても楽しそうでした。

## 2. スマート農業の展開

本改良区は、スマート農業にも力を入れています。

受益地内に、北上川の洪水ピーク流量を低減するなどの役割をもつ一関遊水地がありますが、この遊水地で平成12年度からは場整備事業

(1ha 区画) が始まりました。

遠藤さんから「是非見てもらいたいものがある。」と、案内していただいたところが、その遊水地の中に建つ平泉統合揚水機場。その屋上には、GPSアンテナと無線アンテナがありました。遠藤さんは「次期担い手となる 20～40 代の青年農業者で組織した“一関研農同志会”の会



平泉統合揚水機場の屋上に設置された GPSアンテナと無線アンテナ（固定局）

員と一緒に、北海道農業研究センター、士別市、岩見沢市などで ICT 農業の研修に行ってきました。最先端の IT 技術を活用したスマート農業が、一関遊水地の大区画ほ場で絶大な効果を発揮できると確信して、営農組合に GPS 環境の整備を提案し、導入に至りました。この GPS 固定局から半径 5 km の範囲の農地で位置情報が受信可能となります。将来的にはロボット農機や無人運転を導入し、日本一のスマート農業を展開していきたい。」と意欲を見せました。

### 3. 小水力発電施設

本改良区では「地球の未来を考え、農業団体として何ができるか」を検討した結果、農業用水を利用した水力発電を事業化するという結論に達し、施設の整備を進め、平成 22 年度から農業水利施設を利用したマイクロ水力発電所「照井発電所」が稼働し始めました。また、平成 27 年度からは、小流量、低落差の箇所にも設置できる“らせん水車”で発電する「荻野発電所」が稼働しています。この荻野発電所は小学校の目の前に設置されており、小学校の環境学習の場としても利用されています。



荻野発電所にて 日常点検をする遠藤さん

遠藤さんは「海外製だからと敬遠されるが、構造は単純。ゴミが引っかかることもないし、騒音も無

く、大きな落差を必要としないので、一般的な落差工であれば、設置可能。各地から見学者が来られて、メリットだらけだと説明しているのですが、あまり普及しないのが残念。故障もないですよ。また平成30年度には国内初となる国産のらせん水車による発電所の建設を進めている。」と語ってくれました。

#### 4. 職場の上司から

上司である阿部事務局次長兼工務課長に遠藤さんについて伺ったところ、「毎日、農家のために一生懸命頑張っている。出勤から退社まで120%の力で働いている。本当に感心している。土地改良区のために生まれてきたような存在。天職じゃないかな。かんがい期には休日関係なく、パイプラインの見回りにも率先して行ってくれる。改良区にとっても、地域にとっても貴重な存在です。」と誇らしげに語ってくれました。

遠藤さんは「農家の方からパイプラインから水が噴いた！と連絡をもらえば、誰よりも早く駆けつける気持ちでいる。目標は“救急車よりも速く”です。自家用車に開栓棒を常備しています。開栓棒を取りに改良区に戻る時間がもったいない。賦課金をいただいているから、呼ばれたら行くのが普通ですよ。」と充実した表情で語ってくれました。



上司の阿部工務課長(左)と遠藤さん(右)

#### 5. 最後に

遠藤さんに今後の抱負を聞いた。「生まれたときから水田が近くであり、本改良区も身近な存在だった。市町村合併やJA統合が進む中、農家にとって本改良区が一番身近な存在であるべき組織だと思っている。地元とのつながりや連絡をこれまで以上に密にして、地域農業のために頑張りたい。また、今後は改良区同士のつながりも必要不可欠であることから、改良区の若手職員で改良区の将来について語る場を創りたい。」と熱く語ってくれました。

現場第一主義をモットーに照井堰用水管内を駆け巡る、元気印の遠藤さん。遠藤さんらの尽力により、照井堰用水がスマート農業の先進地として注目される日は、そう遠くないと強く感じた筆者であった。

**【東北農政局農村振興部設計課】**